



IBJ防除情報

(*は、Ishihara Bioscience Japan=石原バイオサイエンスの略)

創刊号

石原バイオサイエンス (IBJ) は、平成23年3月より隔月毎に防除に関する情報を皆様方にお届け致します。皆様とIBJを繋ぐ情報紙になればと考えております。今後ともご愛読をよろしく御願いたします。



困っているんだ~

いまどきの防除

(病害虫の発生予察と薬剤による防除対策)

- 農水省は2月17日、向こう1か月の主要病害虫発生予報を発表しました。その中から主な作物を対象に、発生が「多い」と発表された病害虫とその地域及び防除農薬(当社の推奨農薬)を一表に纏めましたので推進のご参考にして下さい。

作物別	病害虫名	発生が多い地域	防除農薬(当社推奨農薬)	
野菜 (施設)	トマト	灰色かび病	カリグリーン	
	なす	アザミウマ類	東海、北九州	ウララDF、アタブロン乳、ガゼット粒
		コナジラミ類	四国	ウララDF、テルスター水和
	ピーマン	アブラムシ類	四国	ガゼット粒
	キュウリ	うどんこ病	四国、九州	ドーシヤスフロアブル、カリグリーン アカリタッチ乳剤
		褐斑病	四国	ドーシヤスフロアブル
	いちご	灰色かび病	四国	カリグリーン
		ハダニ類	関東、東海	アカリタッチ乳剤

※使用に当たっては、製品ラベルをよく読み、登録内容の確認を充分に行ってください。

※展着剤を使用する場合は「まくびか」をお奨めします。



新しい農薬です

IBJの新農薬 (適用拡大を含む)

- 本年2月1日以降3月5日までの間に登録された主な新農薬 (適用拡大を含む) は、次の通りです。

登録日	薬剤名	登録内容 (適用拡大を含む) の あ ら ま し	
		対象作物	内 容
23. 2. 2	ワンサイドP乳剤	だいず	・使用時期を、従来のイネ科雑草5~8葉期から、イネ科雑草8~10葉期(但し、収穫60日前まで)に適用拡大。使用量は10a当り100ml(適用地帯は北海道を除く全域)。
		ばれいしょ	・適用地帯を「北海道」から「全域」へ拡大。
	フロンサイド水和剤	やまのいも	・対象病害/葉渋病。使用時期を、従来の「収穫14日前まで」から「収穫7日前まで」に適用拡大。
	フロンサイドSC	やまのいも	・葉渋病に適用拡大。希釈倍数/2,000倍、使用液量/100~300L/10a、使用時期/収穫7日前まで。
		小麦	・雪腐小粒菌核病を対象に、少水量散布法へ適用拡大。希釈倍数/250倍、使用液量/25L/10a。

※詳しくは、当社支店にご照会ください。

なんで??

どうして??



防除に関するQ & A

Q 水田除草剤の包装(袋)に、「初. 中. 後」の透し文字が印刷されていますが、その意味と入れる理由を教えてください。

A このような透し文字は、水田用除草剤にのみ入れられており、目的はいわゆる[誤使用の防止]です。

水田の除草剤には色々な薬剤があり、どれを選んでよいか農家の方も悩むところだと思います。

そこでこれを分かりやすくするために使用する時期により次のように分類し、それに当てはまる除草剤に「透かし文字」を入れて間違いの無い使い方が出来るようにしています。

- ① 代かきから移植後およそ1週間以内の間に使用されるものを「初期除草剤」といい、透かし文字「初」を入れている。
*初期除草剤は、土壌混和处理の場合では移植4日前まで、その他の土壌処理では移植直後から移植後7日頃までの雑草の発生前もしくは、発生始めに使用される除草剤で、代かきから移植までの期間が長い場合や、雑草の発生が緩慢で不斉な条件下で使用される場合が多い。
- ② 移植後およそ10日から25日位の間に使用されるものを「中期除草剤」といい、透かし文字「中」を入れている。
*ノビエの1.5~3.5葉期に処理して、既発生の雑草を枯殺すると共に残効性も付与された除草剤である。
- ③ 移植後およそ30日頃の時期に使用されるものを「後期除草剤」といい、透かし文字「後」を入れている。
*移植後30日以降、ノビエや広葉雑草の後次発生や残存個体が見られ、それによる雑草害や次年度の発生源となることが懸念される場合などに、使用される茎葉処理効果をもつ除草剤が該当する。

尚、これらに該当しない「一発処理除草剤には、透かし文字は入れなくても良い」ことになっています。

どんなこと? どういう意味? (用語解説)

一発処理除草剤とは??

*1回の散布で広範な「雑草」に効果が高く、しかも効果が長期間持続する水稲用除草剤をいいます。

水田の除草は、かつては田植え前や田植え後数日以内に土壌処理型の除草剤を散布し、その後残存した雑草や残効の切れて散布後に発生してきた雑草を防除するために、更に茎葉処理型の除草剤を散布するというように、複数回散布する方法が広く普及していました。1980年代になると、この一発処理剤が開発され、水稲除草剤の「使用回数」は減少し、省力技術として広く普及し、現在最も多く使用されている除草剤です。

当社の新しい一発処理除草剤としては、フルチャージ1キロ粒剤及びジャンボ剤、フルフォース1キロ粒剤、フルイニング1キロ粒剤などがあります。

ご説明
します。



発行 **ISK** 石原バイオサイエンス株式会社 本社 普及部

〒112-0004 東京都文京区後楽1丁目4番14号

TEL 03-5844-6320 FAX 03-3812-6548

ホームページ アドレス <http://www.iskweb.co.jp/ibj/>

